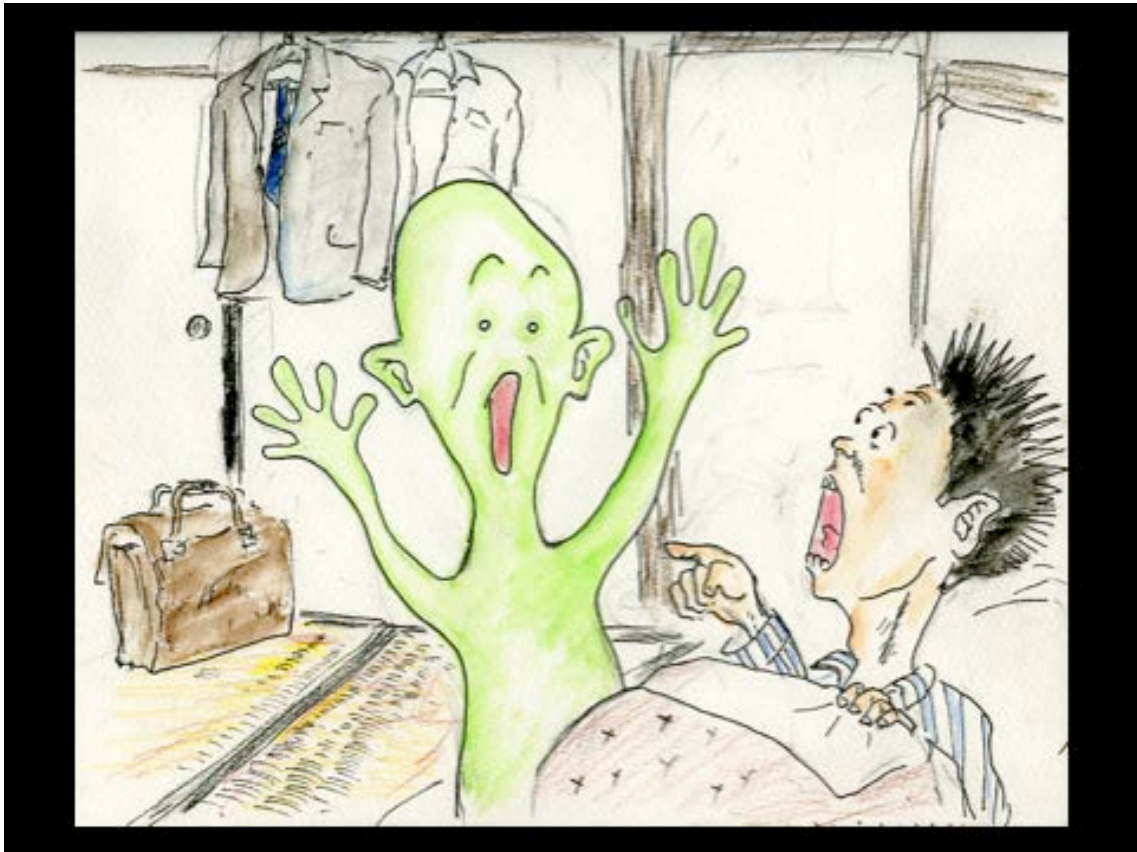




もうそろそろ時効だと思うので、奴の話をしましょうか。それにしても長いあいだ、ぼくはさまざまな病名をつけられて、さまざまな科をたらい回しにされました。内科から始まり整形外科、神経内科、精神科、それもこれも奴のせいなのです。でも最初に言っときますがぼくはいまもう奴のことを恨んではいません。だってきっと奴も苦しかったに違いないのですから。



奴の名はひつつきお化け、お化けと聞いてゾッとしましたか？そう、ぼくだって最初こいつを見たときは飛び上がってしまいましたよ。いや怖くてという訳じゃないんです。だってね、今どきお化けなんて流行らないし、それにこいつときたらとてもだらしないじいさんの格好で出てきたんです。それに情けないしわくちやの顔で涙をボロボロこぼし鼻を垂らして泣きながら言うんです。

「兄ちゃん、すまんなあ。すまんなあ。ワシどこにも行く当てがなくての一。あんたにひつつかしてもらうけど悪く思わんでくれなあ。ズズー（鼻をすする音）」

それも夜中の2時。目を覚ますとこの小汚いじいさんがぼくの目の前30センチのところに現われたんです。こいつときたらぼくの布団の上にまたがっているんです。それで顔をぼくに近づけて耳が遠いのか大きな声で話しかけてきました。こいつが乗っかっているので身動きも出来ません。ぼくは驚いて叫ぼうとしたのですが声が出ません。しばらくの間、奴はズルズルビービー泣きながらぼくにひつつくことを謝ってましたがやがて消えてしまいました。



その翌日、朝からとても肩がだるいのです。まさかひつつきお化けのせいなんて最初のうち考えもしませんでした。何だか気分が悪くて会社に行く気がしませんでした。言い忘れましたがぼくは当時27歳のサラリーマン。妻と子供が二人いました。二人とも成人してるはずです。えっ？はずとはどういうことかってですか？ええ、今は事情があって会ってないんです。とにかくその朝、あまりにも肩が重くてだるいので会社を休んでかかりつけの内科の先生のところへ行きました。



ちょっと頼りない先生なんですけど混んでないので早く見て貰えます。
この先生、眼鏡をずらしながら喉を診て

「あー、こりゃ風邪だね。喉も張れとるし。薬出しときます。それ
じゃお大事に。」ろくに聴診器も当てないで風邪はないと思うんだけ
ど。ま、こんなもんかと思って薬飲んでたのですが一向に治りませ
ん。ますます肩が重くだるくなってきます。結局一週間会社を休ん
でしまいました。これでは会社首になりそうなので、何とか治そう
とまた例の内科にいきました。すると先生は首をかしげて

「ふうーん。まだ治らないの。おかしいねえ。こりゃ内科の病気じ
ゃないかも知れないから整形外科へ行ってごらん。」



要するに内科でさじを投げられたんです。紹介された整形外科医はひげ面の怖そうなマッチョマンでした。

「ふむふむ、紹介状によると肩が抜けそうにだるいそうだが、ちょっと診察してみよう」と言うやいなやぼくの痛い腕を後ろにねじ上げました。ぼくはギャッと叫びました。「情けない男だな。我慢せい。」と外科医はすごみます。そんなこと言たって痛いものは痛いのです。散々痛めつけられ、あげくの果てに「こりゃ脊髄に悪性のものがあるかもしれんから入院して調べよう」と言うのです。

癌の疑いと言われれば入院しないわけにはいきません。それでぼくは市民病院に入院させられいじくり回されました。CT だの MRI だの脊髄造影だの、ほんともう拷問ですねあれは。その結果「よく分からん」でしょう。それでもって入院料って目の玉飛び出るほど高いんですよ。差額ベッド代だの付添い料だの。医学なんてまるで強盗ですよ。だってそうでしょ、例えばテレビ壊れて電気屋呼んで「治りませんでしたけど修理代頂きます」なんて電気屋が言たって誰も払いませんよね。もう憤りましたね。・・・でも他に頼るとこな

いしね。でも整形外科でも原因不明で追い出されて。でも肩のだるさはひどくなる一方なんです。その頃はもう退院しても会社行ける状態じゃなくて家で寝てばかりでした。会社は首になってしまいました。



ある日思い切って妻に言ってみました

「ぼくね、最初の夜すごく怖い夢をみてね。身長50センチばかりの汚いじいさんがぼくの上に乗かってきて身動き出来ないんだ。それでぼくの目の前まで顔を近づけてくるんだ。ひつつきお化けなんだって、そいつ。そいつのせいかなぼくの病気。」

妻は驚いて目をパチクリさせました。

「なに言ってるの？あなた、大丈夫？ひつつきお化けが原因だと思ってるの？・・・あっ、分かった、あなた、ひょっとしてナルコレプシーじゃない。そういえばあなた最近よく突然眠るし、それってきっと睡眠発作だわ。ナルコレプシーの場合、幻覚をみることがあるのよ」



妻は看護婦で病気のこと詳しいんです。それで妻はぼくを神経内科の専門医の所に連れて行きました。この専門医はぼくにいくつか質問して簡単に「おたくナルコレプシーのようだからこれ飲んどいて」と薬をくれました。薬瓶の表示をみるとアンフェタミンとあります。ぼくは文系ですけど、アンフェタミンが覚せい剤であることくらい知ってました。それで妻に「これってやばいんじゃないの？」と聞いてみたのですがよく分からないらしく「先生がいいって言ってるから、飲めばいいんじゃない」とあいまいな返事。人のことだと思って薄情な。いやいや愚痴は言いますまい。

それでぼくはアンフェタミンを飲んだのですが、これがひどいことになっちゃって。・・・四六時中、あのじいさんが出てくるようになったんです。

ビイビイ泣いて鼻水たらしながらぼくの背中にひっついていてのです。それで

「すまんのー、すまんのー、迷惑かけるのー」

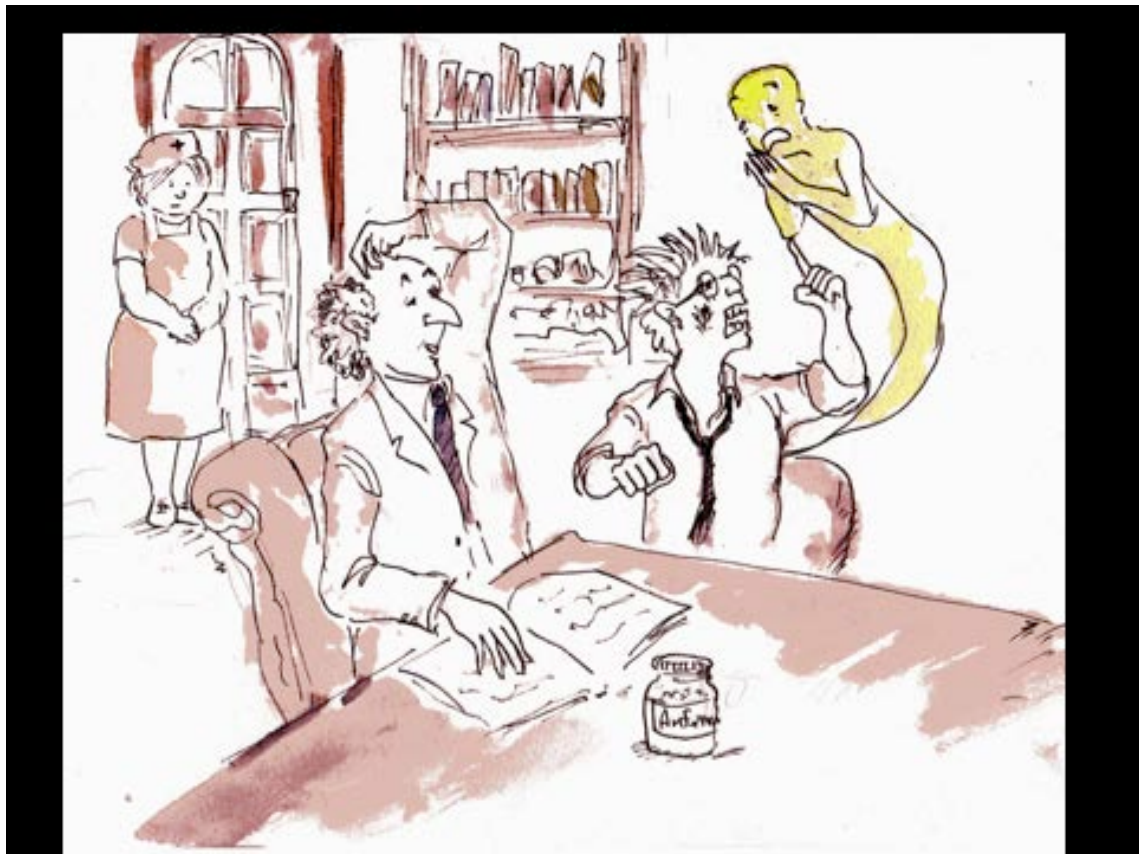
と言うのです。ぼくは腹が立って

「この野郎！離れろ！じじい、このくそじじい！お前のせいで会社くびになったんだぞ！」

何とか背中 of じいさんを振り落とそうと必死に暴れました。ぼくは妻に

「ねえ、このじじい見えるだろ。全部こいつが悪いんだ。後ろに回って引きはがしてくれよ！頼むから」

ところがはたからはこのお化けは見えないらしく、ぼく一人がしゃべり暴れているように見えたそうです。妻や子供は怖がってぼくが狂ったと思ったようです。



気がつくとぼくは精神病院の個室に入れられてました。で、相変らずじいさんはぼくの背中にくっついていきます。

ひょろっとした精神科医がやってきて

「やあ、気分はどうですか？背中にくっついてるじいさんはまだいますか？」

ぼくが「はい」と答えると医者は悲しそうな顔になって言いました

「そうですか。しかたないから明日から薬増やしてみましよう」

と言ってそそくさと行ってしまいました。薬が増えてからじいさんはますます元気

に大きな声で泣くようになりました。謝るくせにぼくの背中から離れようとしません。泣き声がうるさくて眠ることも出来ません。ぼくはだんだんじいさんを憎むようになりました。それで壁に背中を何度もぶつけてみたのですがぼくが背骨を痛めただけでじいさんは何ともありません。そして「すまんのー、すまんのー」と泣くばかりです。



ぼくは精神科医に「このじいさんを何とかしてください。自分ではどうすることも出来ません」と訴えると「ありゃまあ。背中を壁にぶつけすぎてひどいケガしてますよ。困ったですねえ」と言いながら向こうへ行ってしまいました。代わりにやってきたのは筋肉ムキムキの看護師3人組でした。ぼくはあっという間に拘束衣を着せられて身動きがとれなくなっていました。これはとてもまずい展開です。そうなんです。他の人にはこのじいさんが見えないのでぼくがじいさんのことを訴えると妄想がひどくなったと思われてしまうのです。それでじいさんのことを人に言うのをやめました。

「どうですか？おじいさんはまだ見えますか？」

精神科医が尋ねました。ぼくは猿ぐつわをされてるのでしゃべれません。

モグモグモグ・・・。「あっ、こりゃ失礼。これじゃしゃべれないよね。君、猿ぐつわ取ってあげて。」精神科医が看護婦さんに言いました。猿ぐつわが取れました

「いえ、そんなものは見えません。ぼくの妄想でした。先生本当に

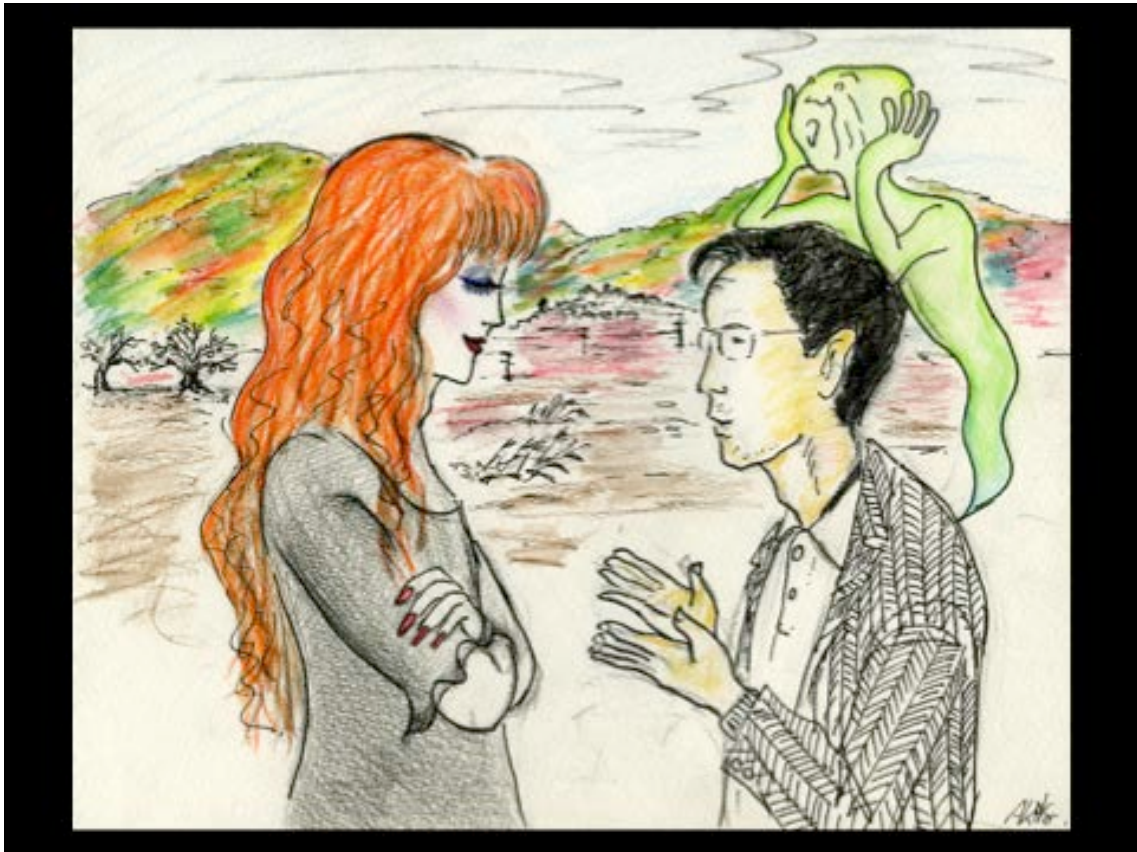
ありがとうございました。お陰ですっかりよくなりました。」

本当はしっかりじいさんが見えるのですが言えは言うほどひどい目にあわされそうなので、それからはひっきりジジイのことは誰にも言うまいと心に決めました。自分でもこのじいさんは幻覚だと思いうようにしました。妄想が消えたということでぼくは精神病院を退院することになりました。でもぼくを迎えにきたのは妻ではなくぼくの父方の祖母でした。妻は子供二人を連れて離婚していきました。ぼくは両親と早く死に別れてこの祖母に育てられました。それでぼくは祖母の住む田舎に連れて行かれ、そこで住むことになりました。



白樺林が遠くに見えます。目の前には蒼く澄んだ湖が広がっています。遠くの白樺林の木立がその澄んだ鏡のような湖面に映っています。時おりの風が湖面をさすり、その度に白樺の鏡像が乱れます。もう秋なので風も冷たいのですが、湖面を見つめていると心がおちつきます。精神病院を退院して3年たちました。ぼくはずっとここで療養生活を続けています。

仕事も妻も子供も友人も失いました。それもみんなひつつきじじいのせいです。ぼくはずっと背中 of じじいを憎み続けていました。



なんとかじじいを引っぱがそうとして祖母には内緒で霊媒師のところへも行きました。これが妙に化粧の濃いおばさんで真っ黒のビラビラした服を着ていました。もっとびっくりしたのは「どうされたの？」というその声。太い声でなんと男じゃありませんか。ぼくが後ずさりすると

「ま、失礼しちゃうわね。これでも優秀な霊媒なのよ。さ、診てあげるからもっとこっちにいらっしやい！」

と毛むくじらのごっつい腕で引っぱり寄せられました。

「あれま、こりゃえらいことだわね。あんたの背中にいるのはタチの悪い『子泣き爺い』じゃないの。でも大丈夫。あたしが必殺の呪文を唱えてあげるから」

というやオカマの霊媒師はお経のような文句をオガオガ唱えてからブルース・リーのような声でキューと叫ぶのです。それを何度も繰り返すのです。そのキューが来るたび背中のじいさんが痛がるのです。

「止めてけろー。止めてけろー。」

そして痛みを避けるためになんとじいさんはぼくの背中からぼくの中に潜り込んでくるのです。ぼくは思わず「止めろ。」と叫んでいました。じいさんは申し訳なさそうに

「兄ちゃん、すまんなあ。身体半分だけ入れさせてくれろ。」

冗談じゃありません。結局、オカマの霊媒師のお陰で事態はよけい悪くなってしまいました。



それからは人に頼っても仕方ないと諦めて、自分でいろいろやってみました。じいさんとぼくは一心同体なのだから、じいさんを餓死させるにはぼくが食事を一切絶てばよいと考えて絶食に入りました。すると祖母を始め村の人がやってきて「尊い修業をされてる」と言うのです。でも修業なんてものじゃありません。こちとらひたすらじじいが憎くて「死なばもろとも」の覚悟です。案の定じいさんは弱ってきて「ひもじいよー、ひもじいよー」と泣きます。



「よしこりゃいける」と今度は山伏の真似をして山野を駆け回りました。するとじいさん更に弱ってきて「苦しいよー苦しいよー」と泣きます、「ざまあみろだ」。ところがそのうちぼくが飲まず食わずの荒行をしているという噂が村中に広まって、ついにはよその村からも人がやってきて即身成仏の荒行なさっている尊い行者様だと手を合わしていく人が出てきました。ぼくに説法をしてくれと頼む人々まで現われました。でもぼくはそんな高尚な事をやってるわけじゃない。無論断りましたよ。それがまた謙虚な行者様だと話題になる始末。もう手に負えません。

そのうち、ぼくの身体は骨と皮ばかりになり見かけはほとんど骸骨のようになったのですが精神的には元気でこんなに愉快的ことはありません。だってあの憎たらしいじいさんがいまは見るも無残に息絶え絶えになっているのですから。



「どうだ、じじい苦しいか？ざまあみろ！」

ぼくはじいさんに話しかけました。考えてみればぼくの方からじいさんに話しかけたのはこれが始めてでした。なぜか憎すぎて話すのも嫌でした。勝手に取り憑いてぼくの人生を無茶苦茶にした憎きじじいなのです。苦しい息の下でじいさんは相変わらず泣いています。

「おお、兄ちゃん。すまんかったなあ。ほんとにすまんかったなあ。」

「バカヤロー、このクソジジイ。俺はもう兄ちゃんと呼ばれる年齢じゃねえんだ。68歳だぜ、68。てめえのせいで28歳の美青年がよ！いまじゃ老いぼれだ。40年だぜ。おまえもまあよく飽きもしないで俺に取り憑いてくれたよな。でももうおまえもおしまいだ」

ぼくは勝ち誇って言いました。するとじいさんは悲しそうにうつむきました。

「兄ちゃん。ワシをあんたの身体から引っぱりだしてくれ。悪いけどワシにはもう自分で出る力がないんでな。」

「じじい、いま何て言った？おまえ、俺の身体から出てくれるのか」

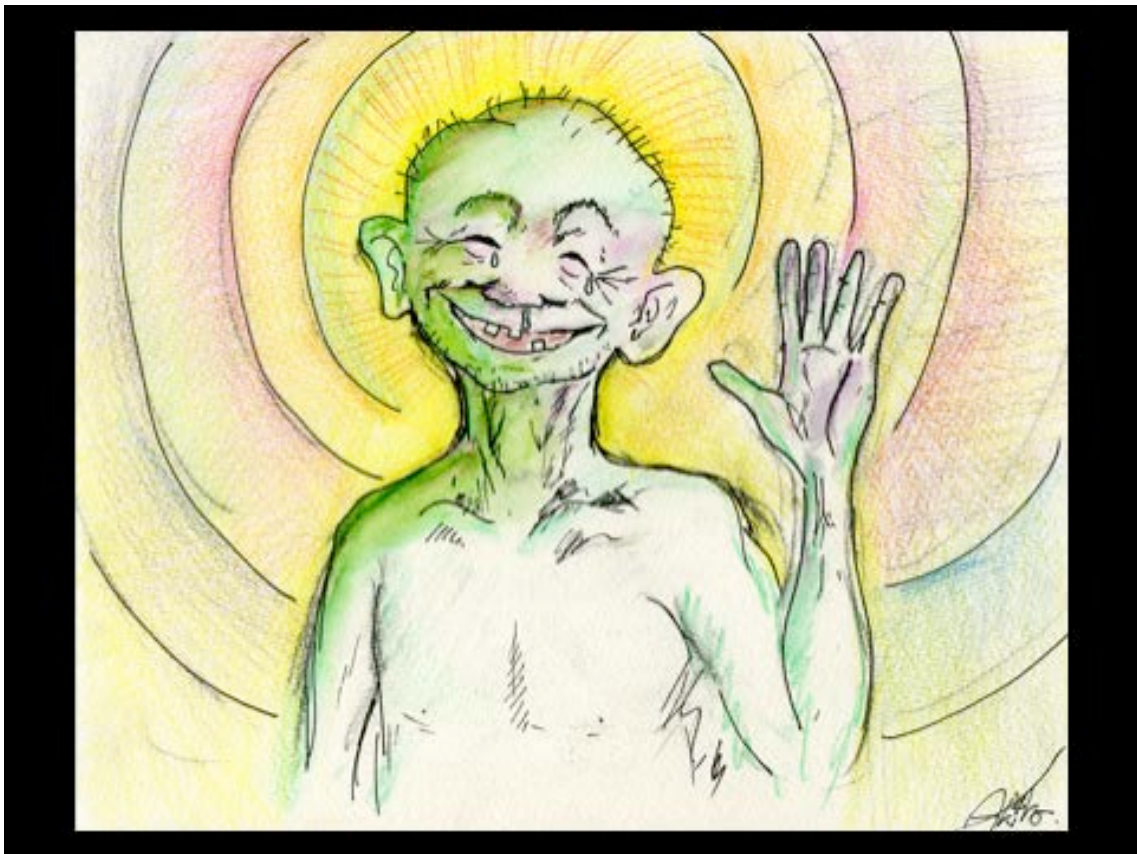
「あい」（歯が抜けているので「はい」にならない）

「で、でも。おまえ、俺の身体から抜けたらどうなるんだよお？」

「ワシかえ？ワシはあんたの身体を抜けたら地獄に行くことに決められとるんじゃ。それが怖さに今まであんたに迷惑かけてしもうた。もうそろそろ潮時じゃろて。ほんにすまんかったの一」

　以外な展開にぼくはあっけにとられてしまいました。そしてぼくの中で何かが弾けました。ぼくは小声で言いました

「じいさん。地獄って、怖いんだろ。・・・もう少し、俺のなかに居てもいいぞ」



「兄ちゃん、ありがとね。ほんと感謝するよ。兄ちゃんは優しいからなあ・・・とても気持ちが悪くなった。それじゃ、ほんとにありがと。さよなら・・・」

いつも鼻を垂らした泣き顔のじいさんの顔が一瞬晴れ晴れとした笑顔になりました。次の瞬間、じいさんは消えていました。



「おい、じいさん。どこへ行った？おまえチカラないって言ってたじゃないか。ぼくに引っ張り出せって言ってたじゃないか。おい、じいさん。じじい。こら！出て来いってば！」

ぼくは何だか悲しくなってボロボロ涙をこぼしながら叫んでいました。ぼくの顔はまるで慣れ親しんだじいさんの泣き顔みたいでした。



あれから5年です。ぼくは73歳になりました。でも元気です。いまはもう荒行なんて全然しません。ぼくの話を知りたい人には時々集まってもらって話します。人生ってやつをね。一生けんめい血みどろになって戦ってる人へ。

ぼくが言いたいのは戦う相手も悲しみをいっぱい持っていて、相手をむやみに憎まないで受け入れてあげたら少し気持ちが楽になるってことです。相手が人間であれ病気であれ何であれ・・・。

